「アラ還」世代は荒野を目指せ

「ほんとうに残念だった」「最後のパーパットがねえ」「いやいや、あの年齢でよく頑張ったよ」。連休明けの七月二十一日、アラ還（アラウンド還暦）世代のおじさんたちはゴルフの全英オープンの結果にちょっぴり自信がわいたに違いない。スコットランドのターンベリー・ゴルフコースで行われた今年の大会では米国のタイガー・ウッズ選手（33）や日本の新星、石川遼選手（17）らが次々と予選落ちするなかで米国のベテラン、トム・ワトソン選手が海風の強い難コースで優勝を競った。「これを入れたら決まり」という最終十八番ホール二㍍のパーパットがはずれて三十六歳のスチュワート・シンクが初優勝したのだが、大舞台で主役を演じたのは確かにワトソン選手だった。

トム・ワトソン、一九四九年ミズーリ州生まれの五十九歳。一九七二年の全英オープンの初勝利をはじめメジャー大会八勝は歴代八位。全英オープンで五勝した彼は一九八三年の全英優勝がメジャーの最後の表彰台だった。伝説のプレーヤーになっていた名手が四半世紀を経て全英オープンの最終日に戻ってきた。

記憶力がめっきり衰える。人の名前や少し前に読んだ本の書名がのど元でひっかかって出てこない。老眼鏡はずいぶん前から必需品。体力にも自信が持てない。そんな「アラ還」世代の背中をワトソンのゴルフはぐっと押してくれる役割を果たしたようだ。ちなみに全英オープンの最年長優勝は一八六七年のトム・モリス選手の四十六歳三カ月。ワトソン選手は百四十二年ぶりの記録更新は果たせなかったが、アラカンの気力、体力を存分に見せつけた。日本の同輩諸兄も老いてなんかいられないではありませんか。

ちょうど同じ日、麻生太郎総理が綱渡りの末に自分で衆議院を解散した。総選挙は八月十八日公示、同三十日投票と日程も定まった。八月の総選挙は一九〇二（明治三十五）年以来、百七年ぶり。北海道がいくら涼しいといっても八月の選挙は候補者やスタッフには過酷だ。旧盆中の取り組みも課題になった。「先祖供養のさなかに電話するのは逆効果だろうか？」「都市部の若者たちはそろって帰省するし」と戸惑う声も聞こえた。そして総選挙は最終章に近づく。

四年前の秋、小泉純一郎首相が仕掛けた「郵政選挙」で自民党は大勝した。ポスト小泉として登場した安倍、福田、麻生内閣はいずれも次の総選挙向けの「表紙」のはずだった。「小泉の遺産」が次の総選挙であまり減らないように新総理の人気に頼ろうとしたのだ。しかし、安倍、福田はいずれも一年で政権を放り出した。急きょ押し立てた麻生には沈みかけた政権党の息継ぎ装置、シュノーケルとしての期待もかかったが、立ち上がりから「漢字が読めない」などとあざけりの視線を浴びた。彼の発言もしばしば問題になり政治的な資質に赤信号が灯った。「元気な高齢者をいかに使うか。この人たちは皆さんと違い働くことしか才能がないと思ってください。働くということに絶対の能力がある。八十を過ぎて遊びを覚えても遅い」。日本青年会議所の会合（七月二十五日、横浜市）の発言。青年会議所のメンバーにはどんな才能があるのだろう？　高齢者を「働くしか能がない」と言い切ってしまう精神の貧しさ。この麻生発言こそが今の政治の「合わせ鏡」ではないか。いかにも薄っぺらで居丈高な視線の、その先に私たちの暮らしの現実が横たわっている。麻生に嫌気し、自民党にこの際「お灸をすえてやろう」とお仕置き選挙のムードが高まるのも合点がいく。

「政権選択」を掲げた総選挙のあとにどのような政治と暮らしがやってくるのか、そこがこの夏の焦点だ。たとえば、生産現場の非正規雇用労働者から「ネットカフェ難民」になってしまった人々はこの四年間の政治をどんな思いで振り返り、政治に何を求めているのだろうか？　「郵政民営化でこの国に活力が生まれる」のだと小泉が叫んだ時には「ネットカフェ難民」という言葉すら生まれてはいなかったのだ。結婚を控えた若者たちは？　そして「アラ還」世代のおじさんたちも来し方行く末についていろいろな思いや不安を抱えていることだろう。年齢を重ねた末に「後期高齢者」だなんて、とってもオシャレな言葉でくくられないうちにもの申しておく必要がある。昨秋に行われるはずだった総選挙が〇八年末になり、ついには衆院議員の任期満了のどん詰まりまで延びた。新しい何かが始まるような気がする。エキサイティングな夏。

〈圭〉